



Title	懐徳 第5号
Author(s)	
Citation	懐徳. 1927, 5, p. 1-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88726
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

懷

德

第五號

懷德堂創學二百周年
同 重建十周年 祭典並記念式號

懷 德 堂 友 會

懷德 第五號

懷德堂創學二百周年
同 重建十周年

祭典並記念式號

大正十五年十一月六日(土曜日) 本堂講堂に於て、
懷德堂創學二百周年同重建十周年祭典并記念式を舉
行せり、式次第左の如し、

一、祭典

第一令(午前十時)

着席

第二令

献儀(舊門人並聽講生奉仕)一同起立敬禮

獻儀(同)

右奏樂

理事長祭文朗讀 教授、顧問、理事、評議員、幹事、委員起立

理事長新奉祀者祭文朗讀 同右

奉祀者列名

物故講師 (物故順)

内田銀藏先生、原勝郎先生、西村時彦先生

物故功勞者 (物故順)

土居通夫君、水落庄兵衛君、上野理一君、鈴木馬左也君、

小山健三君、西村時彦君、坂仲輔君、住友吉左衛門君

拜禮 教授、顧問、理事長、評議員總代、大臣代理、府知事、

第三令

市長、講師總代、遺族總代、新奉祀者遺族總代、來賓總
代、舊門人總代、聽講生總代、素讀生總代

献儀(舊門人並聽講生奉仕)奏樂

垂章(同)

右一同起立敬禮

二、記念式(祭典に引續き)

第四令

理事長式辭朗讀

教授教務報告

祝辭朗讀 内閣總理大臣、宮内大臣、文部大臣、府知事、市長、

京都帝國大學總長、大阪醫科大學長

聽講十年三年繼續者賞品並表彰狀及素讀終了證書授與

理事長挨拶(一同退場)

畫餐(辨當)實業會館に於て

三、講演(午後一時)

ヒュームの正義觀念に就て 京都帝國大學教授文學博士藤井健治郎先生
聖諭廣訓に就て 京都帝國大學教授文學博士 狩野直喜先生

孔夫子と知天命 朝鮮帝國大學總長 服部宇之吉先生

△懷德堂遺書遺物展覽

是より先懷德堂に於ては、準備其他の助力を求むる爲、堂友會員に通牒して、十月十九日(火曜日)午後七時より會議室に第一回の打合會を開く、今西、太田、野口、山本、坂田の五幹事、飯島、岡田、河野、中川、井上、平野、小沼等の會員集合し、松山教授、吉田助教授、藤塚書記等臨席す、松山教授より式の順席方法等を説明せられ、且つ係を置き事務を分擔すること、系主任は今晩來會せしものに就て會長松山教授より指名すること、主任以外の係員は更に適當の日時を定め集合して決定すること等を議決し、第二回の會合は十一月二日(火曜日)午後七時より開く旨、堂友會幹事より會員諸氏に傳ふる事とし、九時三十分退散せり、

十一月二日午後七時來會せるもの、坂田、今西、飯島、岡田、岩淵、竹田、鍛冶屋、平野、野口(幸)、中川、山本、太田、井上、石川、森口、野口(定)、吉田、巖本、内村、益滿、河野、稻田、林田、田中、音代、長澤、不破、酒井(全)、小沼の諸氏なり、

小講堂を以て會議室に充て、一同着席、藤塚書記も列席し、左の如く係員の分擔を定めて同九時半散會せり、

總務係 小沼(主任)、坂田、今西、飯島、

設備係 岡田(主任)、飯島、岩淵、竹田、鍛冶屋

記録係 小沼(主任)、平野、野口(幸)、中川、山本、

受付係 太田(主任)、今西、井上、石川、森口、野口(定)、

接待係 來賓擔當 坂田(主任)、稻田、林田、

遺族擔當 今西(主任)、益滿、河野、

伶人擔當 大町(主任)、吉田、

堂友會員聽講生擔當 山本(主任)、巖本、

内村、

樓上來賓擔當 寺部(主任)、中納、野口

(祥)

擊柝係 中川(主任)

献饌係 野口(幸)(主任)、小沼、岡田、坂田、井

上、飯島、平野、

書庫及携帶品預係 平野(主任)、田中、音代、長

澤、不破、酒井(全)

警備係 飯島(主任)、小沼、

愈當日たる六日となるや、午前八時係員一同參集、松山會長及吉田主幹の指揮に従ふて、各其の部署に就く、午前九時より左の記念會役員及講師等參着、

理事長水田仁助、理事今井貫一、全上野精一、全小倉正恒、全田中隆三、評議員勝本忠兵衛、全木間瀨策三、全愛甲兼達、全池上四郎、全杉村正太郎、全土屋元作、全野々村政也、全林市藏、全本山彦一、幹事成田軍平、全岡野廉平、講師稻束猛、全財津愛象、

次で來賓遺族等續々參會、其の數約百五十名に達せり、重なる諸氏左の如し、

宮内大臣代理子爵植松雅道、大阪府知事申中川望、大阪市長關一、京都帝國大學總長荒木寅三郎、大阪醫科大學長楠本長三郎、朝鮮帝國大學總長服部宇之吉、京都帝國大學教授狩野直喜、京都帝國大學教授藤井健治郎、青本善祐、有田邦敬、稻畑勝太郎、稻葉作治郎、石崎酉之允、伊藤千太郎、石原善三郎、岩崎義人、飯田吉三郎、石原定孝、生田鹿之丞、石濱純太郎、伊藤願也、岩橋繁雄、漆島佐吉、上野伊兵衛、上松寅三、浮田桂造、小笹國雄、大島鎮治、逢阪彌、大槻吉平、大橋房太郎、大槻式、大里猪熊、落合保、小栗一雄、田中芳哉園、森牧二郎、鹿島浩、改正源右衛門、片山宇一、勝賀野鹿衛、貝田四郎、金山

季逸、木村彦右衛門、木下貞太郎、北川武藏、木村ちか、栗山寬一、小林藤藏、小林吉人、小山平治、小山恒男、佐藤壽夫、阪野昇一郎、佐藤了秀、齋藤吊花、重藤利一、澁谷邦之助、鹿田靜七、白川朋吉、須藤甚之助、田中藤太郎、橋尙藏、谷響、垂水善太郎、竹中藤右衛門、高瀬武次郎、竹原友三郎、津田勝五郎、土屋安彦、十橋眞吉、土岐達、土居剛吉郎、中野間菊雄、中井終子、中條熊次郎、中村恒吉、中村健次郎、中目覺、中井木菟麿、永井繁、西村幸子、代西村康哉、岩付環、羽生隆、林眞英、林熊子、平尾平吾、平佐惟一、廣瀬德藏、富士原清吉、鮎子多正雄、藤田德次郎、藤澤友吉、福兵虎雄、堀居左五郎、松尾源太郎、牧田宗太郎、間宮不二雄、松本平三、松山夫人、宮崎博、水落庄兵衛、三輪時雄、村岡長太郎、代鶴見中佐、森下博、森平兵衛、梁井種男、安川佐次郎、山室宗文、山中馨、山口貴雄、吉村哲三、吉村安兵衛、渡邊千代三郎

斯くて定刻の午前十時となるや、第一令の撃柝鳴響く、乃ち教授、理事長を初め各役員、講師、伶人、來賓及遺族、舊門人堂友會員一般聽講生及素讀生等各々設けの席に着く、嚴肅なる記念祭典は、第二令を以て始まりぬ、

先づ舊門人並聽講生奉仕の下に褰幃を行ふ、一同起立敬禮す、次に舊門人並聽講生奉仕して五種の神饌を献ず、此の間唼曉たる三管の奏樂起る、此の日別

に久邇宮家より酒饌料金壹萬疋、遺族中井木菟麿氏より梨實壹籠の献奠あり、右畢つて理事長は徐に祠堂前に進み、左の祭文を朗讀す、

維大正十五年十一月六日、懷德堂記念會舉懷德堂創學二百周年、重建十周年記念式、理事長永田仁助謹以清酌庶羞之奠、敬祭懷德堂師儒諸先生之靈曰、

於乎美矣、懷德之堂、道溯洙泗、以惇典常、學宗濂洛、訓士有方、兩非光價、危言騰芳、人心以正、學術以昌、奕世相承、風聲縣長、闢民之績、衆具仰望、今茲丙寅、百載是當、重建之後、閱十星霜、又築書閣、萬卷之藏、息焉游焉、足以滌腸、予等小子、敢掬餘香、恢宏遺緒、冀道益彰、惟神聰明、靈其翺翔、敬陳心曲、虔侑酒漿、尙享、引續き新奉祀者の祭文を朗讀す、

維碩園西村先生、天資超邁、德邵ク才高ク、懷德堂ノ廢絶年アルヲ慨キ、奮然蹶起、志ヲ繼述ニ誓ヒ、記念會興ル、名譽ノ重建、實ニ先生首唱ノ功ニ頼ル、後講師ト爲リ、經ヲ執リテ道ヲ講ジ、諄諄倦ム罔ク、士子悦服ス、維男爵吉左衛門住友君

風格清遠、門望高顯、推サレテ會長トナリ、衆望ニ孚アリ、財團ヲ組織スルヤ、評議員トナリ、巨資ヲ醸出シ、事業ヲ襄助シ、協贊ノ衷、終始渝ルナシ、維健三小山君、初會長ニ副トナリ、後又推サレテ評議員トナル、維通夫土居君、維理一上野君、維馬左也鈴木君、維庄兵衛水落君、維仲輔坂君、凡諸君子、或ハ推サレテ評議員トナリ、或ハ任ニ理事ニ在リ、老成練達、信厚ク望重ク、心ヲ協ヘ力ヲ戮セ、事業以テ張ル、維銀藏内田先生、勝郎原先生、學問淵博、識見卓拔、會ノタメニ演講シ、聽ク者蒙テ啓ク、於庫堂ノ重建シテヨリ、十星霜ヲ閱ス、今又藏書ノ閣ヲ増シ、緗素架ニ滿チ、學子麀集シ、絃誦日ニ盛ナリ、茲ニ三先生七君子ノ功績ヲ追思シテ、永ク矢ツテ誼レシ、謹ムデ神位ヲ設ケ、虔ムデ俎豆ヲ致シ、式ツテ厥ノ靈ヲ格ス、今ヨリシテ後毎歲先師儒ニ同ク奉祀シテ以テ恒典トナス、靈其レ顧歆シテ益々斯ノ堂ヲ護レ、

大正十五年十一月六日

財團法人懷德堂記念會理事長 永田仁助

此の間教授、顧問、理事、評議員、幹事、委員起立す、

次で左の順序にて拜禮を行ふ、

授教、顧問(欠席)、理事長、評議員總代(本山彦一氏)、大臣代理、府知事、市長、講師總代(服部宇之吉氏)、遺族總代(中井木寛齋氏)、新奉祀者遺族總代(西村康哉氏)、來賓總代(荒木寅三郎氏)、舊門人總代(生谷卯兵衛)、聽講生總代(小沼量平)、素讀生總代(中納愛子)

次で第三令を以て、前の如く舊門人聽講生奉仕して奏樂裡に饌を撤し、幃を垂る、此の時一同起立敬禮す、是にて記念祭典を終り、第四令もて引續き記念式に移る、

理事長左の式辭を朗讀す、

維大正十五年十一月六日、懷德堂記念會、懷德堂創學二百周年重建十周年記念式ヲ舉グ、理事長永田仁助衆ニ代リテ辭ヲ陳ベテ曰ク、夫懷德堂ノ興ル、二三好學ノ士ノ、師ヲ聘シ學ヲ講ゼシニ裊マル、後官許ヲ得テ乃チ公學トナリ、絃誦ノ聲絶ヘザル者、百四十有四年、其ノ教化ニ裨補シ文運ヲ興隆スル蓋基大ナリ、王政維新百度更改、學徒離

散シ、堂竟ニ廢絶ス、後四十年、西村碩園先生懷德堂考ヲ著ハシ、其ノ事蹟ヲ叙ブ、是ニ於テカカ世亦之ヲ言フモノアリ、明治四十三年大阪人文會、懷德堂先師儒ヲ公祭セムコトヲ首唱シ、遠近之ニ和シ、名ケテ懷德堂記念會ト曰フ、尋イデ財團ヲ組織シ、懷德堂ヲ重建シ、徒ヲ聚メテ經ヲ授ケ、師ヲ聘シテ演講シ、以テ舊業ヲ弘ム、規模古ヨリモ光ナルアリ、本年正ニ創建二百周年重建十周年ニ値フ、抑本會宗旨タル、國民道德ノ進歩ニ力メ學術ノ發達ヲ圖リ、本邦文化ノ向上ニ資スルニ在リ、而シテ其方法主トシテ講義講演ニ由ル、其ノ回数、之ヲ始ムルニ、講義每週二回、講演毎月二回、後漸次之ヲ増シ、今ハ則チ講義每週五回、講演毎月五回乃至六回ニ及ベリ、而シテ開始以來今日ニ至ルマデ、回ヲ重スルコト講義一千二百五十回講演三百九十回、其ノ聽講延人員約六萬五千有餘名ヲ算ス、本年又新タニ書庫並研究室ヲ築キ以テ研究ニ便ス、本會ノ事業恭ク天聽ヲ邀ヘ、辱クモ金幣ノ賜ヲ拜スルコト已ニ兩次ニ及ベリ、聖恩ノ優渥ナル轉々感泣ニ勝ヘザルナリ、本會事業ノ

發展此クノ如クナル所以ノ者、上聖恩ノ沛澤ニ浴シ、下府市及郷紳ノ捐資贊襄ヲ蒙ムルニ賴ル、惟フニ本會ノ府市ノ公助ヲ得ルハ、往昔懷德堂ノ幕府ニ於ケルト事相似テ、其ノ實ハ大ニ之ニ軼グ、郷紳ノ捐資贊襄ハ彼ノ五同志ト事相齊ウシテ、其ノ大小ハ則チ日チ同ウシテ語ルベカラズ、仁助思フニ、曩昔懷德堂ノ官許ヲ得テ浪華ノ公學トナリシハ、菴菴先生ノ力ニ由ルト雖、其ノ本クトコロチ原ヌルニ、同志學チ好ムノ誠以テ之ヲ致セリ、本會ノ興ルヤ、碩園先生ノ功多キニ居ル、而シテ其ノ端ヲ發セシハ人文會諸士ノ首唱ニ在リ、夫涓滴ノ微モ能ク金石ヲ穿ツ、同聲相應ジ同氣相求メ、力ヲ協セテ學チ興シ、竟ニ能ク斯ノ業ヲ成ス、一命ノ士モ苟ニ心ヲ物ヲ濟スニ存セバ、其ノ成就スルトコロ願ツテ亦大ナラズヤ、方今我國文運大ニ開ケ、教育ノ道亦大ニ備ハル、然リ而シテ其ノ完備ヲ論ゼバ、前途尙ホ遼遠ナルモノアリ、夫官府ノ事業自カラ定限アリ、學校ノ教育劃一ニ流レ易シ、此ノ常套ヲ脱シテ別ニ新境ヲ開キ、以テ官府事業ノ未ダ及バザルトコロ、學校教育ノ未ダ至

ラザルトコロヲ補ヒ、以テ教育ノ完備文運ノ興隆ニ資シ、而シテ徳性ノ涵養ト學術ノ研究ト一以テ之ヲ貫キ、別岐アルナキ、此レ本會ノ希圖スルトコロ、今ヨリシテ後、踴勉努力以テ其ノ宗旨ヲ達成シ、文教ニ裨補シ社會ニ貢獻シ、以テ 聖恩ノ萬一ニ報イ奉ルモノ、此レ仁助等同人ノ切望シテ已マザル所ナリ、今禮ヲ舉グルニ當リ、聊カ所懷ヲ陳ベテ以テ式辭トナス、

次で松山教授登壇、左の教務場告をなす、

▲懷德堂 創學二百周年 重建十周年 記念式教務報告

閣下並諸君、本年は懷德堂創學二百周年重建十周年に當りますので、本日茲に記念式が舉げらるゝに際しまして、私は復興當初から懷德堂記念會の聘に應じて參り、教授として其事業にたづさはつて居ります關係上、この十年間に於ける教務並にそれに關係する事柄、尙又その事業の目的精神につき、閣下並に諸君に向つて申述ぶるを得ます。ことは、洵に光榮に存するどころであります。懷德堂記念會の目的とするところは、國民道德の

進歩に力め、學術の發達を圖り、本邦文化の向上に資するにありませぬ、其方法は講義講演出版獎學等でありませぬ、本懷德堂は懷德堂記念會の目的を達成する機關でありませぬ、此等事業の詳細は要覽に記載してありますが、今其大畧を申述べませぬ、大正五年九月本堂が出来上りまして、同十一月から定期學術講演を始めました、初は毎月二回でありましたが、大正九年四月から回數を増加して、毎週一回開くことになりまして今日に及んで居ります、これは文科に屬する諸學科の學術講演であります、京都帝國大學文學部教授を講師に御願ひして居ります、其講演は各教授専門の學科につき、一題目を立て、數回に亘りて、各自の研究せられたるところを平易に講説せらるゝものでありまして、文科に屬する諸學科の最高等なる學術的智識を普及するものでありませぬ、この外に大正八年六月から毎月一回通俗講演と申すものを始めまして今日に及んでおりませぬ、この講演の目的は市民の常識を養ひ品性を向上せしむるにありませぬ、大正十一年以來は京都帝國大學諸學部の教授を講

師に御願致しまして、或は政治、或は法律、或は經濟、或は理工農醫等百科の學につきて、毎年循環して講演を願ふことになつて居ります、かやうに懷德堂の講演は全く京都帝國大學諸教授の講演であります、これは諸教授がよく本會の目的を諒解せられ、其社會的文化事業なるがために、多大の時間を割きて本堂の爲に援助の勞を吝まれざるものでありまして、その高義に依りて、幸に其研究蘊蓄を聽き得るものでありまして、ひとり本堂の光榮であるのみならず、洵に大阪にとりては大きな幸福と申さねばなりません。

次に講義は大正六年一月開講式を舉げまして、爾來毎週二回定日講義と申すものを始めました、これは主として所謂聖經賢傳を講ずるものでありまして、其目的は徳性を涵養するにありませぬ、これには世に随分異論者のあり、中には極端な反對意見さへ抱く人々もある事と存じますが、かゝる事は一朝一夕に議論では是非を決するには餘りに重大なる問題であり、又たとひ議論で決し得たとしても輕々しく之を廢し去るべきものではありませぬ

先づ徐ろに各々其信するところを實行して、其是非利害を實際の成果の上に就いて講究すべきものと考へます、私の信じますところでは聖經賢傳を貫流するところのものは、道德至上の精神信念であつて、其道德たるや仁義忠孝に歸するもので其仁義忠孝は我國體を天壤とゞもに無窮ならしむべき國民道德の骨髓たるべきもので、しかもそれは忍びざるの仁の一字に歸するものであります、この仁心を涵養するものが聖經賢傳であります、一枚の書を讀み一時間の講義を聴きまして、この仁心を涵養する事が出来るのが聖經賢傳の特長であります、この信念から聖經賢傳を講ずるものであります、大正十年一月から定日講義の回数を毎週一回増加して三回と致しまして深く漢學を研究せんと欲する人々のために講ずる事に致しました、又大正八年九月から日曜朝講といふを始め今日に及んで居ます、これは日曜午前九時から十時まで、主として青年學生のために孝經四書を順講するものであります、其主意は孝經四書は國民的道德を養ふ上に於て、經典となすべきもので、

また國民道德の淵源を究め、且又東洋道德の菁華を知らんには、是非とも之を通讀するの要あることを認め、之を講ずるものであります、この外に大正十二年四月から文科講義と申すものを始めました、これは現在哲學文學の二科につきて東西兩洋の名著を講ずるものであります、哲學文學につきて深く研究せむと欲する人々のために設けたものであります、講師は主として京都帝大文學部の教授であります、一は思想の一方に偏するを防ぎ一は東西思想の異同を研究するに資し、少しにても東西文明を融合し一の新しき文明を創造すべき日本國民の使命を果す上に貢獻せんと欲するものであります、東西を兼ね修むるを主義として居ます、又大正六年五月より素讀科なるものを開始しました、これは少青年に孝經四書の素讀を課するものであります、其主意は徳性の涵養と漢學の學習とに資するを目的とするものであります。以上の講義講演皆今日に繼續して居ます、講義は回を重ねる事一千二百五十四、講演は三百九十回其聽講延人員は六萬五千餘人に上りて居ります。

本堂の講義講演は主として一定の職業を有する成人のために行ふもので、年限を定めず何等の資格を與へざる代りに志ある人は何人にも何時からにても入りて聽き得るもので、また來るものは拒まず去るものは追はず至つて自由な修養所であります、従つて普通一般の學校の如く多數の生徒を收容し多數の時間を授業することは出来ませぬ。次にこの十年間に於ける講義講演以外の事業を申し上げますと、大正十一年十月孔子祭を行ひしことが其一であります、これは孔子歿後二千四百年を記念せむがために行ひしものであります、これは昌平校の釋奠儀注を參酌して、之を行つたのであります、出版は孔子歿後二千四百年記念事業の一たる論語義疏の校印と懷德堂考の重印と、懷德堂講演集の發行とであります、論語義疏の校印は根本伯修が義疏の原形を破壊せしを舊に復し、尙現存せる義疏の古鈔本數種につきて校勘を加へしものであります、懷德堂考は故西村博士の遺著でありますが、之に懷德堂復興小史と、中井木菟麿君の懷德堂年譜とを附して、重印せしものであります。

す、懷德堂講演集は定期講演と通俗講演との講演集でありまして、各々第一輯を出しました、毎年各々一輯を出すの豫定でありまして、本年は百科通俗講演集第二輯第三輯を出すやう已に準備を了りました、本年中に出版の運びになることゝ存じます、次に奨學の事でありますが、これは昨年永田仁助君より漢學奨勵のため、金五萬圓の寄附がありました、之を基金とし年々其利子を以て漢學を研究するものに給與して、漢學を保護奨勵するものであります、已に京都帝國大學文學部支那哲學科學生に一人の給與希望者がありました、已に詮議を遂げまして之に給與することになりました、尙この外に昨大正十四年の夏には支那學の講習を行ひました、向後も經費の許す限り、夏季に於て有益なる學術的講習を行ひたいと存じて居ります、又豫ねて文庫並に研究室建造の計畫がありました、昨年故西村博士記念會より碩園記念文庫の名を以て同博士舊藏書全部の寄贈があり、尙又先年より愛甲兼達君の寄託書があり、之に加ふるに本堂復興以來購入また寄贈に係る藏書を合せ

て約二萬六千冊に達し、いよく儲藏の書庫を要することが急となりまして、愈々本年六月起工し先月末日を以て工を竣へました、藏書は主として漢籍であります、今後は漸次之を完備致しまして、漢學研究者のための特別文庫たらしめんと存じて居ります、四庫全書がもし出版せらるゝことあれば、必ず儲藏したいと望んで居ります、まだ藏書搬入挿架の運びに達しませぬのみならず、目錄の整理も充分に出来て居りませんが、來年の初になれば、漢學研究者のために、公開し得るに至るであらうと存じます。

講義開始以來今日までの定日講義聽講生の數は、六月迄の分は八百五十名、文科講義聽講生百三十四名、其中兩者重複の分を除きますると、合せて九百四十三名であります、講演の聽講者の數は延人員よりは調査して居りませぬが、恐らくは講義聽講生に數十倍するものと存じます、これらの人々は何等の資格を得んがためではなく、又直接何等かの物質的利益を得んがためではなくたゞ聖經賢傳を愛し、或は學問研究を喜び、修養を義務と

し道樂とする底の人々であつて、國家社會の中堅となり、之が支持者となるべき人々であります、この中、三年以上講義の聽講を繼續せしもの四十三名、十年に及ぶもの七名あります、十年に及ぶといふが如きは世に有り難き人でありまして、宜しく之を表彰すべきあります、今回本會に於て好學章を與へ、懷德堂講學獎勵規定に據り、各々十三經注疏一部を賞與し、尙特待聽講生といひ、自今堂費月謝を免除して、一切の講義講演を聽くことを許すことになりました。

尙聽講生并に聽講者の有志が、堂友會なるものを組織致しまして、堂の爲めに力を盡すの風がありますことは洵に喜ぶべきであります、又其中に中心となりて常に堂の爲めに努力を吝まず盡し呉れるものも數氏のみではありません、尙又聽講生聽講者中には、少數ながら官位閑歴年齢を忘れて、聖賢の道を楽しみ、又學術の講演を聽くことを喜ぶ珍しい人士を見ることを得るは誠に喜ぶべきことであります、また此處に來り學ぶ女子も多數ではありませぬが皆無ではありませぬ、これら

は餘程の勇氣と忍耐のあるものでなければ出来ぬことであり、ここに特に紹介するに足る一人の珍しい女子があります、六年前懷徳堂に登りて、始めて漢文に接せしものでありますが、非常に漢文に興味を有するやうになり、四書五經の素讀を了へ、一週數回の定日講義幾んど一日も缺かすことなく、風雨寒暑を厭はず數年に互りて刻苦勉強を持續しました、晝間は家事に勤勞し、夜間深更に至るまで讀書するを常とし、夜を徹することも少くはなかつたといふことでもあります、餘りに熱心なるところから定日講義以外一週數回の讀書を課しました、しかるに其勉強の効果は著しくあらはれ、讀書の力頓に長進し専門の學者にても生まやさしくは讀む事の出来ぬ十三經注疏杯も完全にとはいへませぬがどうにか讀み得るやうになりました、のみならず、この女は奉仕の心に篤くありまして、懷徳堂の藏書七千餘冊の分類目錄を獨力にて完成しました、これは勿論目錄學の智識を授け指導はいたしたのではあります、が、兎も角各書の内容を吟味して、支那經籍の分類法

に従つて、之を分類するのであります、一寸誰にでも出来得ることではありませぬ、二年餘に亘り、零碎の時間をも割いて、この業を成し遂げましたことは、一は奉仕の念に燃ゆるものがあります、一は堅忍不拔の志あるものでなければ出来ぬことでもあります、今後もかやうな人物が續々とあらはれんことを希望して已まざる次第であります。

世界大戰以來教育の機會均等が高唱せられ、又近數年來成人教育の聲が高く、已に文部省の事業として實行せられて居ります、本懷徳堂は大正五年以來徳性の涵養學術の研究並に普及のために門戸を開放し、何人にも何時からにても講義講演を聴き得る事業を行ひ來れるもので、世人の熱望する教育の機會均等の一部が實現せらるゝものであります、又本堂の講義講演は主として一定の職業を有せる成人のために夜間之を開くもので、徳性の涵養學術の研究を目的とする成人の教育であります、ただ期限課程を定めませぬが、其代りに無期限な永久的な成人教育とも申すべきものであり

ます、これも文部省の御趣旨に合ふべきことゝ存じます、本懷徳堂が幸にも世人の叫ぶところ、又文部省の施設と符合するところの事業を爲し來れることは、大阪の誇ともいふべきことが出來やうかと存じます。

昔の懷徳堂は庶民教育を主眼として起りましたが其學問は當時に於て士君子の修むる學問を授けしものであります、又竹山先生が出来るゝに及びては、天下に重きをなし、關西の文運にも至大の關係を有するに至りました、今の懷徳堂もこれを公開して、廣く社會一般の修養機關となつて居りますところは昔の懷徳堂とその性質を同うして居ります、其程度は昔にも優りて、學界の權威である大學教授の講説を聽き得るものでありまして一個の庶民大學とも申すべきものであります、しかし今日の有様は決して完備したものではありません、今後益々之を發展完成せしめ、大學教育の機會均等を實現することが出來、徳性の涵養と學術の研究と相並び修められ、其一を偏廢することなく、中庸に所謂尊徳性而道問學をモットーとし

て進みたいと存じます、徳性涵養の方法は之を聖經賢傳に求むることは懷徳堂の主義とするところでありますが、徒らに古に拘り滞りて、學術の進歩眞理の闡明を無視するの意味ではなく、世に聖經賢傳の何物たるを知らずして、一概に之を無用視し之を排斥するものに反して、其裏に儼存する貴き精神と敎説とを以て徳性を涵養せんとするものであります。

尙懷徳堂の一の目的は將に衰滅し去らんとする東洋の古學即ち漢學を保護獎勵することであります若しこの儒學及漢學が衰滅し去りますれば、如何にして我國の文化並に國民道徳を發展し、且又その淵源を究むることが出來ませうか、これまことに寒心すべきでありまして、自然の成行に放任し去ることが出來ませぬ、これ懷徳堂記念會が微力ながらも、之を保護獎勵せむとする所以であります、幸に規模は極めて小ではありまするが漢學獎勵の事も已に實行の緒に就き、文庫も近く公開せられ斯學を研究する人々に便宜を與ふるを得ますることは、實に喜ぶべきことゝ申さねばなりません

ぬ。

斯様に懷徳堂も復興いたし、徐々に發展の道程をたぐることを得るにつけてまして、此等を興すに力ありたる人々及經營維持に功勞ありたる人々を思はずには居られませぬ、これ今回懷徳堂記念會の物故諸先生並に功勞者諸賢の有志ある所以であります。

懷徳堂復興につきましては、大阪人文會員諸君、特に、西村碩園先生の功勞を感謝せねばなりません、尙當時の知事市長の誠意ある援助、大方諸君子の義助によつて復興を遂げ、ついで今日の懷徳堂記念會理事長を始め理事諸君の資力と勞力とを客まざる熱誠盡力、市府の助成と大方諸君子の義助とによりて、基金も漸次増加し、基礎も漸く鞏固を加ふるに至りました、又特に文庫に關しましては、西村碩園先生の功大なるものあることを申さずには居られませぬ、只今懷徳堂の藏して居ります書籍は、碩園先生舊藏書全部と愛甲兼達君の寄託書とが大部分であります、しかるに愛甲君の寄託書は故剗山衣洲翁の藏書でありまして剗山

翁は生前碩園先生とは非常に親交ある間柄でありました、翁の歿後碩園先生は其親友なる愛甲君に勸めて、之を購入して懷徳堂に寄託せらるゝやうに盡力せられたものであります、それゆゑ今日懷徳堂文庫の藏書は其大半は碩園先生によりて出来たとも申されます、これは先生に對して感謝せねばならぬことであります、それにつけても憶ひ起しますことは、先年永田理事長が君と俱に本會の擴張事業の計畫を其筋に申し上げしことがありました、その擴張事業は書庫並研究室の建造一、漢學研究者の保護獎勵二、講演集の發行三、文科講義の擴張四の四事でありましたが、今は文科講義の擴張の外の三事は皆實現せられました、君若し今日に在りてこの狀を觀られしならば、如何許り喜ばるゝことでありませうか、しかるに今日君を見ることを得ざるは返へすゝも残念の至りであります。

大正二年本堂復興の計畫長くも 天聽に達し、思召を以て金二百圓を御下賜に成りました、尋いで大正十二年本會の事業長くも 天聽に達し、思召

を以て金參千圓を御下賜に成りました、聖恩の優渥なる轉た感激に勝へざる次第であります、又本年六月久邇宮殿下は皇典講究所總裁として當地に御成りに相成りし際、同妃殿下と御同列にて本堂へ台臨遊ばされましたことは本堂に取りては無上の光榮と申すべきでありまして、これは特に諸君に御報告をいたし、御互に喜を分つべきことと存じます、尙又今日の祭典に特に久邇宮家より金壹萬匹を賜はつたことは、重ね／＼も光榮なる次第であります。

以上懷德堂の教務竝に事業の大略と其目的精神とを申述べたのであります、希くは懷德堂の主義精神と其事業とを善く御諒解下さつて、十分に堂の目的を達成し得るやう、市民諸君の之を利用せられて修養の目的を遂げらるゝやう、尙各々本堂の事業の發展して、ひとり大阪のみならず本邦文化の上にも貢獻し得るやう、皆様の御援助あらむことを希望して已まざる次第であります。

右終つて左記七氏の祝辭朗讀あり、

▲若槻總理大臣祝辭

(本會理事小倉正恒氏代讀)

東亞人文ノ菁華ハ經術文章ニ在リ、我邦國民道德ノ振興、政教學術ノ進展、亦古來繫テ此ニ存スルモノ多シ、大阪舊懷德堂ノ幕允ヲ得テ公學トナリシヨリ二百年、碩學者儒相受ケ、篤學諸家相傳ヘテ今日ニ至リ、懷德堂記念會亦事業ノ開始以來正ニ十週年、懷德堂庶宇翼然トシテ大阪文教ノ一豊蔀ヲ成シ、講義講演規ニ依テ行ハレ、會ノ基金ヲ積ミ、獎學金ヲ設ケ、更ニ文庫ニハ貴重有用ノ典籍ヲ收藏スルアリ、經術文章ヲ講明スルノ道備ハル、其ノ文運ニ寄與シ、邦家ニ貢獻スル所少カラサルハ、復タ言ヲ待タサル所ナリ、

今ヤ堂ノ先儒諸先生ト、會ノ物故司教諸家、及功勞者諸賢トヲ祭リ、堂ノ二百週年並會ノ十週年ヲ記念スルノ式ヲ舉ケラル、人心疑惑ニ陥リ易ク、智德乖睽ヲ虞ヒトナスノ時ニ方リ、俯仰無限ノ感ニ勝エス、

冀クハ關係諸賢ノ傾身勵精、益力ヲ淬礪ニ致シ、師友切磋、更ニ麗澤ノ功ヲ積ミ、堂並會ノ光輝アル歴史ヲシテ愈光輝アラシメ、以テ東亞文華ノ特

色ヲ發揚シ、邦家ノ進運ヲ裨補セラルルアラシク
トシ、
記念ノ式アルニ際シ、一言所懷ヲ抒ヘ以テ祝辭ト
爲ス、

大正十五年十一月六日

内閣總理大臣 若槻禮次郎

▲一木宮内大臣祝辭

(京都内匠寮出張所長子爵植松雅道氏代讀)
本日ノ佳辰ヲトシテ、舊懷德堂師儒諸先生ノ恒祭
竝ニ懷德堂記念會物故講師功勞者ノ祭典ヲ修シ、
併セテ懷德堂公學允許二百周年ノ記念式ヲ舉行セ
ラル、懷德堂ハ維新前ニ於ケル大阪唯一ノ學校ニ
シテ、享保九年ノ創建ニ係リ、後二年幕府ノ認可
ヲ得テ、其基礎始メテ固ク、學主以下累世其人ヲ
得、流風餘韻自ラ千古タリ、明治二年不幸ニシテ
校舍ヲ閉鎖セシト雖モ、其事蹟猶ホ人ノ耳目ニ在
リ、茲ニ記念式ニ際シ、三宅中井等諸先生カ當日
盡瘁ノ勞ヲ思ヘハ、敬慕感謝ノ情愈切ナルモノナ
クシハアラス、次ニ記念會ハ大正二年永田仁助君
等數氏首唱ノ下ニ設立セラレ、克ク先賢ノ遺志ヲ

體シテ其舊業ヲ復シ、純ラ正學ヲ標榜シテ、世道
人心ノ向上ニ資シ、又近クハ故西村時彥博士ノ藏
書碩園記念文庫ヲ併置シテ、内容ノ充實ヲ期シ、
斯ノ如クニシテ今ヤ内外ノ整備全ク成レリ、願ル
ニ大阪ノ地タルヤ、海陸交會ノ要衝ニ當リテ、國
國ノ中樞ト稱セラレ、夙ニ商業ヲ以テ内外ニ著ハ
ル、而カモ國運振張ノ今日、開展暫クモ止マサル
所以ノ者ハ、古來漸チ以テ涵養セラレシ其地方人
士ノ品性ト慣習トニ起因シ、此品性ト慣習トハ即
チ教道ノ効果ニ非スシテ何ソ、曩ニ懷德堂ノ存在
ニ負フトコロアリシモノ、今ユリ以往之ヲ記念會
ニ望マサルヲ得ス、同會ノ自ラ任スルトコロ亦此
ニ在リ、希ハクハ當事者諸氏益奮勵努力シ、往軌
ヲ遵奉スルト共ニ順適スルヲ忘レズ、誓ツテ當初
ノ宣言ニ負カサランコトヲ、聊カ所思ヲ抒ヘテ式
辭ト爲ス、

大正十五年十一月六日

宮内大臣 一木喜徳郎

▲岡田文部大臣祝辭

(本會理事今井貫一氏代讀)

其ノ經營者ノ功勞ト本會ノ事業トニ敬意ヲ表シ、
一言ヲ述ベテ祝辭トス、

大正十五年十一月六日

文部大臣 岡田良平

▲中川大阪府知事祝辭

懷德堂ガ浪華ノ公學トシテ、精神教育ノ木鐸ヲ執
レルユト一百四十餘年、大阪文化ノ伸張ニ寄與セ
ルヤ極メテ大ナリ、維新以降久シク絃誦ノ聲ヲ絶
チタリシモ、大正二年ニ至リ財團法人懷德堂記念
會ノ設立セラレルアリ、同五年終ニ懷德堂ノ重建
ヲ視、再ビ漢學ノ講演ヲ開キ、爾來既ニ十星霜、
其間宮内省ノ御下賜金ヲ拜スルコト兩次、本日ヲ
以テ記念會創業十周年記念式ヲ舉ゲ、且懷德堂創
建二百年來ノ師儒及ビ功勞者祭典ヲ行フ、
抑々人類幸福ノ基礎ハ道德ニ在リ、國家ノ隆昌ト
曰ヒ、社會ノ安寧ト曰ヒ、家庭ノ和樂ト曰ヒ、一
ニ道德ニ胚胎セザルハ莫シ、大阪ガ能ク商工業ノ
牛耳ヲ執レル所以ノモノ、亦實ニ殆ンド二百年間
懷德堂ガ信奉シテ宣揚セル儒教ノ賜ナラズンバア
ラズ、儒教ハ素ヨリ天理ニ循ヒ人道ニ基キ、萬世
渝ルコトナシ、我邦ハ尙泰西科學ノ長ヲ採リテ、
我短ヲ補ハザルベカラズト雖モ、國本ヲ鞏ウシテ
民福ヲ厚ウセント欲セバ、本邦文化ノ源泉タル儒
教ヲ敬重シテ、之ヲ理會スルニ若カズ、本日ノ盛
典ニ臨ミ、懷德堂創立以來先哲ノ遺德ヲ景仰シ、

古來浪華ノ地、士庶彬々、學ヲ修メ教ヲ宣ヘ、師
表人アリ、道躬行ヲ尙ヒ、卓爾トシテ風ヲ樹テ、
四方於式ス、懷德堂創始以來實ニ二百年、名教ヲ
闡明シ、人心ヲ啓發シ、以テ彝倫ヲ扶持シ、世道
ニ貢獻スル所尠カラス、維新以降 一時中絶セシ
カ、更ニ記念會ニヨリテ再興セラレ、今日ノ盛ヲ
見ルニ至レリ、師儒諸先生ノ德望ヲ揚ケ文教ヲ興
シタルノ遺蹟ハ、既ニ煥然トシテ耿光アリ、記念
會開始以來、堂務ニ盡瘁セラレタルノ諸士、亦前
ヲ顯ハシ後ヲ繼キ、拮据經營、克ク復興ノ氣運ヲ
開キ、偏ニ文化ノ根基ヲ固ム、大大阪ノ今日ア
ル、蓋シ諸先生ノ餘澤ニ負フ所多大ナリト謂フヘ
シ、嗚呼懷德堂ノ淵源、夫レ斯ノ如ク深ク、流レ
ナ此ニ汲ム者ノ世ヲ益スルヤ極メテ廣シ、現ニ鐸
ヲ振フノ士、及來リ學フノ徒、共ニ先賢ノ德ヲ思

ヒ、時世ニ順應シテ、精研倦マスンハ、必スヤ國家ノ進運ヲ裨補シ、本會ノ趣旨ヲ達成スルニ至ルヘシ、

聊カ虔誠ヲ致シテ諸師在天ノ靈ニ告ケ、切ニ微忱ヲ展ヘテ本會關係ノ士ニ望ム、敢テ蕪辭ヲ叙シテ祝辭ニ代フ、

大正十五年十一月六日

大阪府知事 中川 望

▲關大阪市長祝辭

本日茲ニ懷德堂創立二百周年重建十周年記念式、並物故師儒諸先生及功勞者諸賢ノ祭典ヲ舉行セラルルニ方リ、一言所懷ヲ述フルハ最モ光榮トスル所ナリ、由來浪華ノ地風ニ商業ヲ以テ著ルト雖、文化ノ隆昌亦久シク、所謂町人文學ノ旺ナル、海内其ノ比ヲ見ス、其ノ由來スル所ヲ釋ヌルニ、淵源一ナラスト雖、實ニ懷德堂ノ力與テ最モ多キハ、世人ノ齊シク認ムル所ナリ、惟アニ懷德堂ハ、享保十一年始テ幕府ノ允許ヲ得テ公學トナリ、明治維新ノ際一時廢學セリト雖、既往百五十年ノ間、蔚トシテ浪華ノ文教ヲ支持スル所以ノモ

ノ、是レ全ク師儒諸先生相繼テ經テ講シ道ヲ明カニスルニ由ル、其ノ盛ナルニ方リテヤ、關西ノ文運斯堂ニ繫ル、諸先生教化ノ功績大ナリト謂フヘシ、大正二年有志胥圖リテ、財團法人懷德堂記念會ヲ設立セラレ、同三年記念會ノ目的及事業ノ計畫、畏クモ天聽ニ達シ、同年三月特ニ御下賜金ノ御沙汰アリ、同五年九月懷德堂ヲ重建シテ、講義講演等ノ事業ヲ開始シ、今ヤ滿十星霜ヲ閱シ、堂ノ事業倍々盛ヲ加ヘ、教化ニ裨益スル所頗ル大ナルモノアリ、同十二年七月重テ御下賜金ノ御沙汰アリ、同十四年永田仁助君巨額ノ獎學金ヲ寄附シ、又西村博士記念會ユリ其ノ遺書全部ヲ寄贈スルアリ、新築書庫亦方サニ成ル、後學ノ士自今其ノ惠澤ニ浴スル者蓋シ尠カラサルヘシ、嗚呼懷德堂先師儒ノ餘德克ク本堂ノ復興ヲ見ルニ至ラシメ、本堂當事者ノ努力今日ノ盛ヲ致ス、雷ニ本市文化ノ爲ニ喜フヘキノミナラス、亦本邦文教ノ爲ニ慶スヘキナリ、庶幾クハ當事者諸君、倍々奮勵努力シテ道德學術ノ進歩發達ヲ圖リ、一ハ以テ教化ヲ、一ハ以テ本會ノ目的ヲ達成セラレシムコト

ヲ、今此ノ盛典ニ列シ、聊カ蕪辭ヲ叙ヘテ以テ祝辭トナス、

大正十五年十一月六日

大阪市長 關

一

▲荒木京都帝國大學總長祝辭

懷德堂記念會其事業開始十周年、學堂公認二百周年ノ昌期ヲ以テ、莊重ナル記念式ヲ舉ケ、堂ノ先賢先儒及堂ト會トニ功勞アル諸君子ノ祭儀ヲ執行セラルルハ、寔ニ近來希逢ノ盛典ニ屬シ、殊ニ道心危微、民志浮搖ノ今日ニ在テハ、最モ深長ノ意義アル美舉ト謂フ可シ、

顧フニ懷德堂鴻博ノ師儒ヲ以テ、大阪ノ文教ヲ主持スルコト百數十年、就中竹山履軒、經學文章一世ニ卓出シ、門下ノ羣才海内ニ碁布シ、學統ノ隆、人文ノ盛、江戸ノ昌平巒ニ對峙シテ、隱然一敵國ヲ成セリ、此レ實ニ當年ノ大阪ヲシテ、九鼎大呂ヨリ重カラシメタル者ニシテ、市民之ヲ以テ豊臣氏ノ大阪城ト並稱シ、一市千秋ノ記念事トスルモ良ニ以アルナリ、然リト雖モ此堂ノ大阪ニ寄與シ、大阪ノ此堂ニ感荷シテ尤モ忘ル可カラサル

ハ、其聲望ノ隆重ナルニ在ラスシテ、其教道ノ卓異ナルニ在リ、即チ舉世門地ヲ尙ヒ階級ヲ重シタル時ニ於テ、官民平等、士商一視ノ卓見ヲ以テ、一ニ德業ノ進修ヲ鼓勵シタルカ如キ、經筵ヲ公開シテ、有緣無緣ノ民商ニ均ク聽講ノ嘉惠ヲ被ラシメタルカ如キ、經術ヲ民衆化シ、儒學ヲ社會化シテ販夫賈豎ニモ與テ人道民彝ヲ知ラシメタルカ如キ、下帷百數十年ノ久キニ亘リ、道ヲ傳ヘ業ヲ授クルコト、往往三世四世ニ及ヒ、遂ニ一門ノ品性ヲ薰就シ、延テ全市ノ風俗ヲ醇化シタルカ如キ、是皆此堂專有ノ特色ニシテ、他ノ官巒藩學ニ其類ヲ見サル所ナリ、

予常ニ言フ、商業ノ生命ハ信用ニ存シ、信用ノ泉源ハ德義ニ存ス、故ニ德義ナキ商家ニハ生命ナク、一時虛威ヲ振フモ遂ニ敗滅ヲ免レズト、向ニ大阪ノ商界ニ德義ノ人心ヲ結フ者ナカリセハ、其商業ノ敗滅ニ歸スルヤ己ニ久シカラム、而モ乃チ市邑ノ雄富、民物ノ殷賑、歲月ト共ニ加ハリ、居然トシテ海内商業ノ樞紐ト爲リ、五方貿易ノ要衝ト爲ルハ、一市ノ德義、衆商ノ品性、中外ノ信孚

ヲ感召スルニ由ラスムハアラス、此ハ則チ懷德堂百數十年間、仁漸義摩ノ致ス所ニアラスシテ何ソヤ 苟モ然ラハ此堂ニ於ケル感恩ノ記念ト追遠ノ祭儀ハ、正ニ報本反始ノ大道ニ合シ、獨リ一市ノ商運ニ進益スルノミナラス、延テ世道人心ニ裨及スル所、又甚々淺鮮ナラサルヲ疑ハス、予此意義ニ於テ、既ニ本會ノ高義ヲ多トシテ、又今日ノ盛舉ヲ美トシ、轉々欣躍ノ情ニ任ヘス、敢テ胸臆ヲ布キ以テ祝辭ト爲ス、

大正十五年十一月六日

京都帝國大學總長 荒木寅三郎

▲楠本大阪醫科大學長

ソレ我が大阪ハ、事實上日本商工業ノ中心タルノミナラズ、東洋商工業ノ中樞ノ地トナレリ、ソノ大阪ノ今日アルヲ知ランニハ、過去ノ大阪ヲ知ラザル可ラズ、而モ大阪ノ富ノ歴史ヲ説キテ、其餘ノ人文ヲ忘却セントシ來リシハ如何、現今ノ懷德堂、コ、ニ顧ル所アリテ、商業道德ノ必要ヲ説キ來ルコト年アリ、抑モ實業上ノ功績以外ニ於テモ、大阪ニ誇ルベキモノ少シトセズ、葛城慈雲ノ

佛學ニ於ケル、契沖ノ國學ニ於ケル、近松西鶴等ノ純文學ニ於ケル、豐太閤ノ武勳ニ比シテ必ズシモ劣レリトスベキモノニ非ズ、近世蘭醫ノ濫觴ニ於ケル亦然リ、況ンヤ 往時大阪唯一ノ學校トシテ、久シク文教ニ資シ來リシ 舊懷德堂ニ於テテヤ、一面難波ノ文樂歌舞伎等ガ、娛樂的ニ大阪文化ヲ助成シ來リシ傍、隱ニ陽ニ商家ノ品性ヲ陶冶シ、人心ヲ維持セシ漢學者ノ功德ヲ忘ル可ラズ、方今物質文明ノ進歩ト共ニ、精神的ノ修養ノ忽カセニスベカラザルハ、世界大戰後ノ思想界ニ徴スルモ明カナリ、

時恰モ東都ニ於ケル 汎太平洋學會ノ 開會中ニ當リ、人類文化ノ一朝一夕ニシテ築カルモノニ非ザルヲ想ヒ、コノ懷德堂ノ趣旨ニイヘルガ如ク、我が大阪人が今古ニ俯仰シテ自ラ省ミ自ラ戒ムルニ、最適切ナル事業功績ヲ上ゲラレタル懷德堂記念式ニ 臨ミ、聊カ蕪辭ヲ呈シテ 滿腔ノ敬意ヲ表ス、

大正十五年十一月六日

大阪醫科大學長 楠本長三郎

次で松山教授より聴講十年繼續者、聴講三年繼續者に賞品並表彰狀、素讀修了者に修了證書を授與せらる、

▲十年繼續者左の如し

表彰狀

- 岡田 玄 碩
- 野口 幸 雄
- 平野 得 三
- 飯島 溜 三郎
- 小沼 量 平
- 坂田 廣 吉
- 井上 正 美

(各通)

右者本堂定日講義聴講ヲ繼續スルコト玆ニ十年ニ及ベリ洵ニ奇特ノ至ナリトス仍リテ本堂制定スル所ノ賞牌好學章ヲ授與シ本堂漢學獎勵規定第二條ニ依リ十三經注疏一部ヲ賞與シ尙自今名ヲ特待聽講生名簿ニ列シ特ニ堂費授業料ヲ免除シ本堂一切ノ講義講演ヲ聽クコトヲ許シ以テ其ノ堅志好學ヲ表彰ス

大正十五年十一月六日

▲三年繼續者左の如し

表彰狀

- 酒井 全 太郎
 - 酒 井 實
 - 仲田 博 一
 - 吉田 清 德
 - 河、野 清 光
- 右者定日講義聴講精勤ニ付釋志一部ヲ贈リ其ノ好學ヲ表彰ス

(各通)

大正十五年十一月六日

懷 德 堂

▲素讀修了者左の如し

修了證

(各通)

- 小 笹 圭 治
 - 伊 吹 千 惠 子
- 右者孝經四書ノ素讀ヲ修了セシコトヲ證ス

大正十五年十一月六日

懷 德 堂

右授與終りて、理事長の代理として今井常任理事よ

り一場の挨拶ありて式を了り、一同退場す、時に正午、乃ち接待員の案内にて、來賓以下實業會館に至り晝餐を喫し、暫く休憩す、

午後一時より記念講演會を大講堂に開催す、來賓以外の一般聴講者百二十五名、堂友會員聴講生等を併せ、聴衆堂に滿つるの盛況を呈し、婦人の聴講者も多數見受けたり、

第一席、京都帝國大學教授文學博士藤井健治郎先生登壇『ヒュームの正義觀念に就て』と題し、一時間餘の講演あり、其の大意左の如し、

○

支那に於て、性論及び仁内義外論の起りたるは古き事なるが、此の懷德堂の創立されし二百年以前、英國の倫理學會に於て、此の問題に就て討議されたるに興味を感じ、今日茲にヒュームの正義觀念に就てと題する演題を掲げたり、

ヒュームのジャスチスといふは、告子の所謂仁内義外論に當れるや否や疑問なるも、或る程度までは一致せるものゝ如く、またジャスチスは、漢語の義と畧相似たる如く思はる、

ヒュームは、人間の徳を自然的と人爲的とに區別せり、自然的の徳とは、即ち自己の心中に於て如何にすべきかと考へ、それが發して徳となりたる場合を謂ひ、人爲的の徳とは、社會生活の中に於て他のものと組合せられて生じたる徳を指して謂ふ、而してヒュームは、此の人爲的の徳を指して正義と稱したるものにして、告子の所謂義外に當るものなり、然らば此の正義の徳は如何にして起るか、ヒュームは即ち是れ社會生活を可能ならしむる爲に避くべからざるものとせり、而して其の道理は那邊に在りやと云ふに、ヒュームは曰く、

(一) 人間の力は甚だ薄弱にして、一人の力を以てしては、到底文化的社會生活を營む能はず、而も人間の要求は非常に多くして、其の力これに副はざるを以てなり、(二) 一人の力を以てしては、總てに熟達する能はず、故に分業を必要とす、而して一致協同する事によつて、社會生活を營み得る、(三) 協同生活によつて、始めて自由と享樂とを得べしと、即ち社會生活によりて、第一に力、第二に能力、第三に安全、此の三者を得

べし、然らば如何にして此の如き社會生活を可能ならしむるか、即ち第一に心の満足、第二に身体外部の満足、第三に自らの方によつて獲得したる財産、此の三つの實を有することゝなるべし、而してヒュームは、更に此の三實をして安全ならしむるには、先づ第一に財産を安固ならしむる事によりて、始めて此の三つの働きが現はれ来るものなりと云へり、此の考が我々東洋人と相違せる點なり、然れども英國人の思想より言へば、ヒュームの此の考は最も能く其の思想を表現せるものなり、如何となれば英國の議會政治憲法政治なるものゝ起原が、財産の安固、所有權の確保より出發したるを以てなり、即ち社會生活を可能ならしむる爲には、第一に所有權の確立、第二に當事者の同意によつて、賣買讓渡する事を得ること、第三に契約の履行、此の三者は社會成立上の原則なるを以て、ヒュームは之によりて正義不正義といふ事を考へ出せるなり、斯の如くヒュームの正義は、社會生活をなす爲に人間が必ず之を徳として守るべきものなりと考へたるも、所謂是は人爲的

の徳にして、自然に與へられたるものにあらず、ホッブスは、人間の本質は總て利己的のものなりと考へたるが、ヒュームは之と異にして、利他心なるものも認め居れり、ホッブス以來英國の思想家は、利己心を以て何事をも説明せんとし、各個人が利己心を満足せしむる爲に、契約によりて社會若くは國家を作り、それによりて正義道徳が現はれ来る如く説明する所謂契約説に據らんとするも、ヒュームは之に反對し、利己心も同情心もありて正義契約は各人の契約に由つて生じたる者にあらず、そは言語の如きものなり、言語は即ち一種の約束によつて生ずる者なれども、契約によつて現はれたるものにあらず、正義も亦然り約束によりて、所有權の安全、同意による賣買讓渡、契約の履行の三原則が行はれ得るなり、故に正義の觀念は、總て社會の根本的の原則となるものなるが故に、これを人爲的なりと稱する事を得べしと云ふに在り、是に由つて之を觀れば、ヒュームの正義論は、正に告子の仁内義外論に相當るべし、二百年前英國に於ける此のヒュームの議論は頗る

面白き説にして、今より九十年前に起りたる進化論上より之を見れば、頗る幼稚なるものゝ如く考へらるゝも、當時に在りては實に破天荒の説なりしなり、

以上は今日予の説かんとせし一節にして、其の他英國に於ては、同じく二百年前即ち一千七百二十六年に、バトラーと云ふ僧正が、説教集と云ふ書を著はして、英國の倫理界に劃期的なる新しき研究を試みたる人あるも、予が特に興味を惹きたるは、懷德堂創立の際に於ける碩儒三宅石菴、中井登菴、五井蘭洲の三先生が、何れも享年六十六歳にして歿し、ヒュームも亦六十六歳にして歿したること、及び仁内義外論がヒュームによりて研究せられたるなど思ひ合せ、其等の點に興味を持ちて、聊か此の講演を試みたる所以なり。

第二席、京都帝國大學教授文學博士狩野直喜先生登壇、『聖諭廣訓に就て』の題下に、約一時三十分間の講演あり、其の大意を左に掲ぐ、

懷德書院が享保十一年に建てられし後六十年を經

たる天明八年に、聖諭廣訓といふ書が大坂高麗橋一丁目の書林星文堂及び小雅堂より繙刻せられ、中井竹山がこれに序を記し居れり。

是の書は、清康熙帝及び雍正帝が人民に道德の標準を示したる教育勅語にして、康熙帝の下したるは聖諭と稱し十六條より成る、故に之を聖諭十六條ともいふ、又雍正帝のは其の各條を敷衍したるものにして、之を聖諭廣訓といふ、是の書は一萬字を使用せるより、又の名を萬言論ともいふ、即ち清朝に於ける教育勅語としては此の二書ある譯なるが、尙一つ清の世祖が順治九年に下したる六諭なるものあり、其の六諭の教ゆる處は洵に平凡なるが如きも、是は教養なき一般庶民に道德の根本を示すものなれば、専ら平易を旨とせるなり、さて此の六諭は清世祖が始めて作りしものゝ如きも、尙仔細に之を研究するに、明太祖洪武帝が當時の人民に下したる達示六箇條ありて、之を其の儘採用せるものなる事判明し來れり、斯く世祖は六諭を出せるが、其の意味を庶民に普及せしむるには、難解の語を用ゆる能はざるを以て、當時の

地方官にて民衆教育に心を用ゆるものは、俗語を用ゐて其の意味を敷衍したるもの續々出で來れり、其の内六諭衍義と稱する書あり、これが琉球人の手によりて鹿児島に入り、遂に島津家より幕府に献上せるが、時の將軍吉宗公は、享保六年荻生徂徠に命じてこれに訓點を施さしめ、次で翌七年室鳩巢に命じて之を日本文に翻譯せしめ、當時江戸に於ける手習師匠八百人中十人を擇びて御家流に筆寫せしめて、町奉行をして之を刊行せしめたり、六諭衍義大意即ち是なり、

其の後享保十六年美濃の岩村藩が、其の大意を省略したるものを刊行し管内に普及したるが、後天保年間には六諭衍義大意の續篇京都に於て出版されたり、當時大阪の町奉行平賀信濃守の如きは、態々之を取寄せて大阪町民の教養に資したる話もあり、斯く世祖の作りし六諭衍義が、日本に渡來して後世まで日本の教化事業に可なりの影響を與へしは、洵に不思議なる事と謂ふべきが、是れ全く吉宗公が教育に心を用ゐし結果に外ならず、享保時代と云へば我が國文運の隆昌時代にして、支

那に亡びし書も日本にて翻刻され、これが又逆輸入するといふ素晴らしき時代なりしなり、而して其の本案本元たる支那に於て六諭衍義の行はれしは、時代に止まり其子なる康熙帝の時に至り、康熙七年にまた別に教育に關する詔勅を出せり、即ち聖諭十六條なり、今左に之を掲ぐ、

- 第一條 教孝弟以重人倫
- 第二條 篤宗族以昭雍睦
- 第三條 和鄉黨以息爭訟
- 第四條 重農桑以足衣食
- 第五條 尙節儉以借財用
- 第六條 隆學校以端士習
- 第七條 黜異端以崇正學
- 第八條 講法律以儆愚頑
- 第九條 明禮讓以厚風俗
- 第十條 務本業以定民志
- 第十一條 訓子弟以禁非爲
- 第十二條 息誣告以免株連
- 第十三條 誠窩逃以免株連
- 第十四條 完錢糧以省催科

第十五條 聯保甲以弭盜賊

第十六條 解讐忿以重身命

聖諭廣訓は此の十六條に對して、水も洩さぬ説明を一々加へ居れるが、併し其の目的とする所は、一般の讀書人以外にも之を知らしむるといふに在りて、今の言葉を以てすれば、之を宣傳することが必要なりしなり、此の宣傳の方法に就ては、世祖以來非常に苦心せるものにして、爲に其の普及は理想的に行はれ、康熙乾隆時代に於ては、確に一般の人民に非常に効果ありしと言はれ居れり、然るに政治が漸次衰ふるに隨ひ、これも次第に弛み來り、有名無實の如くなれり、其の原因は何かと云ふに、聖諭の普及は地方官の使命なるも、一體此の教化事業なるものは、其の効能の明に見えざるものなり、行政方面に於ては、其の効果顯著なるを以て、自然立身の基となるも、教化事業の如きは人一倍の熱心を以てするも、尙且つ容易に行はれ難きものなり、故に一般の人も自然これに耳を傾けざる状態となりしなり、予が今日此の講演をなすは、今より二百年以前に出來たる外國の

天子の教育勅語を、今日我が國に持來りて之を廣めんと云ふにはあらず、享保時代に六諭衍義が流行し、次で聖諭廣訓が大坂に於て出版されたるが、中井竹山の序文に、昔は之を譯したるものにあらざれば、一般の人は解する能はざりしも、今日は其の儘にて讀む人多くなりたり、と記し居れるを見れば、我が國に儒學といふものが、如何に一般民衆教育に裨益する所多きものたるかを考へたるにて八代將軍吉宗公の考も亦恐らくは同様なりしならむ、今日の懷德堂も、昔の師儒諸先生の精神と同じく、決して學究的研究ばかりが其の目的にあらざるべしと考へ、予は茲に庶民教育が支那に於ては斯の如くなりしも、日本に於ては此の如き運命を有したる事を述べて此の講演を終る。

第三席、朝鮮帝國大學總長文學博士服部宇之吉先生登壇、『孔夫子と知天命』の演題にて約一時三十分間の講演あり、其の大意左の如し、

○ 論語爲政篇、吾十有五而志于學の一章に就きて、之を實説なりと見、また假説なりと見る二つの見

方あり、即ち前者は、孔子の徳即ち人格は、漸次進歩して、終に偉大圓滿なるものとなりしことを

孔子自ら如實に物語るものなりといふ説にして、後者は即ち孔子の人格は、進歩も發達も實現もなし、初めより完全圓滿なるものなりといふ説なり、此の如き相違を來せるは、畢竟聖人といふものに關する考へ方の相違なり、假定説の如きは即ち孔子は天の特別の恩寵により聖人として生れ來りたるものにして、到底常人の企及すべからざるものなりと云ふに在りて、孔子の聖人となりしは、努力修養によりて成りたるものにあらずと云ふ事になるべし、是れ甚だ首肯し難き説なり、如何となれば孔子の徳が天成なりや否やを決せんと思へば、後人の言を聞くよりも、先づ孔子の言に徴するの確たるに如かず、即ち孔子は曰く、我非生而知之者、好古敏以求之者也と、是れ孔子自ら其の生知安行にあらずして、學知利行の聖人たる事を稱せるにて、予は吾十有五而志于學の一章を以て、蓋し實説なりと信するなり、即ち此の一章は孔子の人格が漸次進歩發達せし次第、實現の過

程を孔子が晩年に回顧して如實に述べられたるものなり。

次に此の語中の五十而知天命の一句なり、古註並に朱註等種々説あるも、共に明瞭ならず、予の解する所によれば、孔子は修己治人の事を以て、自己の學問とせられたるを以て見れば、志學より以來三十五年の工夫を積みて知り得たる所の天命とは果して何者ぞ、思ふに努力修養の結果得たる所の道徳一身に備はれりてふ自覺なりしなり、而して此の自覺は自ら成したるのみにあらずして、孔子は天の恩寵によりて、斯くなりたるものなりと信せられたるなり、斯く信ずると共に孔子は、生平深く尊崇せる文王周公死してより已に數百年、聖人上に在らざる爲、教は明かならず道行はれざること已に久し、人類の主宰として深仁の徳ある天は、道の藏れ世の衰へ、人々其の生を遂げざるのを坐視するに忍びず、故に茲に道を明かにし生民の爲に太平を開かんとするの目的を以て、適當なる人を得て其の任に當らしめんとし、孔子に其の使命を降したものと考へたるなり、即ち天は此

の大任に當らしめんが爲に、孔子の身に徳の備はるに至らしめたるものなり、孔子は即ち斯の如く自ら信せられたるが、所謂知天命の意味なるべしと考ふるなり。

さて此の天の使命は如何にして之を遂行すべきかと云へば、勿論政治教化に依つて道を明かにし太平を致すべきなり、それには先づ孔子は位を得ざるべからず、然るに位は與へらるべきものにして、我より求むべきものにあらず、則ち孔子はヤレンマに陥りたる事になるなり、されど孔子は之に關して何等の不安をも感せず、使命を降す以上は、其の遂行の機會をも天が與ふべきものと考へしなり、果せるかな三年の後、地方官となりて、先づ小範圍ながらも道を行ふ機會を與へられたり、其の成績非常に良好なりしを以て、遂に中央政府の大官となり、魯の國に於て道を行ふの機會を與へられたり、然るに當時魯國の政情は孔子が道を行ふには不利なるものありしを以て、先づ其の狀態の改善に着手せしが、殆ど成功せんとして失敗に歸せり、されど孔子は之に屈せず、天より使命

を受けたりと自ら信する以上、其の遂行には百方努力せざるべからずと考へたるを以て、遂に魯國を去つて他國へ行かれたるが、何處の國も其の道行はれず、爲に晩年再び魯に歸れり、是に於て孔子は、其の生存中道を明かにすること能はざれば身後に之を明かにせざるべからず、斯の道を己れの身と共に葬り去るは天に對して相濟まざることを考へたるを以て、遂に經書を修めて、之を世に遺されたるなり、此の時若し孔子が志を得て、身に當りて道を行ふことを得れば、天下或は其の時に於て太平となり得たらんも、經書を後世に遺すといふ事業は出来ざりしならん、孔子 一生の經歷、孔子の人格等は此の知天命の三字を上述の如く解釋せざれば到底了解する能はず、即ち此の如く知天命の意味を了解せざれば孔子を學ぶ事も不可能なるなり、孔子の信せられたる如き天の使命は、何人にも之を學べと云ふ事は出来ざるも、人各々其の分に應ずる天命を知る事を得ば、亦以て孔子の徒たるべきか。

今日の講演四時間に互るの長時間なりしも、滿堂肅

潮 履軒數間圖 一冊 同

(和漢古今に亘り度量衡、墾田、貨鈔、物價、
勞銀等の研究)

本草目録 一冊 同

度量衡彫題 二冊 同

寬政懷德堂改築見込圖並 一冊 同

關係文書張混六曲屏風 一冊 同

水哉子 二冊 同

髦軒弊帶言 二冊 同

絕句逢原 一冊 同

履軒古韻 一冊 同

諧韻瑚璉 一冊 同

老婆心 一冊 同

履軒外集 二冊 同

(月下錄、年成錄を合裝)

洛納奚囊 一冊 同

枕上雜題 一冊 同

履軒古風 二冊 同

懷德堂(在尼ヶ崎町)類焼以前の圖並に關係文書張混六曲屏風 一冊 同

谷文晁歸馬放牛圖 雙幅 (懷德堂講堂障子)

華胥國物語 一冊 履軒手稿

有間星 三冊 同

昔の旅 一冊 同

鷄肋疑文 一冊 同

瑣語疑文 一冊 同

質疑疑文 一冊 同

華胥國歌合 一冊 同

華胥國歌合 一冊 同

風懷百首 一冊 同

古今二微 一冊 同

越今二微吟 (和歌集) 三冊 同

孝經大義 一冊 同

世說彫題 十冊 同

莊子彫題 十冊 同

古文前後集彫題 三冊 同 中井蕉園増

小學彫題 二冊 同

古今和歌集 二冊 履軒首書

中井登菴看竹詩 一幅

康 熙 字 典 四十冊 懷德堂遺書の内

史記彫題略 四冊 履軒著、中井碩果手抄

陽明文錄(第一缺) 九冊 懷德堂遺書の内

東坡集選(零本) 七冊 蕉園手澤本

碩果先生文稿 二冊 碩果手稿

左氏彫題略 三冊 履軒手稿

春秋左氏傳彫題 十五冊 同

詩經彫題 七冊 同

附 詩彫題附卷一冊

禮記彫題略 三冊 同

左傳逢原 六冊 同

古詩古色 一冊 同

古詩得斷編 一冊 同

詩彫題略 三冊 同

尙書彫題 六冊 同

附 附言一冊

周易彫題(合本) 三冊 同

附 周易彫題附卷一冊

梅頤古文尙書 三冊 同旁註手稿

伏生尙書 一冊 履軒考定手稿

尙書彫題略 三冊 同手稿

周易逢原 三冊 同

易彫題略 三冊 同

懷德堂會餞詩卷 一卷

懷德堂卷 二卷

百首贅々殘紙卷 一卷 履軒手稿

史記彫題(削柿) 二十九冊 同

通 語 三冊 同

孟子彫題略 三冊 同

孟子彫題 二冊 同

三國史彫題艸本 一冊 同

孟子逢原 七冊 同

論語彫題略 二冊 同

論語彫題 二冊 同

中庸彫題略 一冊 同

大學雜議 一冊 同

大學中庸彫題 一冊 同

論語逢原 四冊 同

中庸逢原 一冊 同

中庸(天樂樓定本)	一冊	履軒手定
草茅危言	五冊	竹山手稿
竹山先生國字牘	十冊	同
奠陰集	二十冊	同(詩文集)
奠陰略稿	一冊	同
遊芳山記	一冊	同
東稽	四冊	同(東式の研究)
詩漁	一冊	同
東征稿	一冊	同
西岡集	一冊	同
周易傳義	五冊	蕉園首書
四書	三冊	同
春秋左傳	十五冊	同
甲史	一冊	蕉園手稿
越史	一冊	同
騶碧囊	二冊	同(詩文集)
詩經集註	四冊	同首書
禮記集說	十冊	同
杞憂漫言	一冊	同手稿
一宵十賦艸本	一冊	同

彫蟲篇	二冊	同
懷德堂帖	一帖	
(竹山蕉園交游諸名家文詩)		
追善之連歌	一卷	
(中井登菴吉田盈枝二人連吟)		
先哲手簡	五卷	
萬年先生論孟首章講義	一冊	
懷德堂開講々義		
萬年遺稿	一冊	三宅萬年著
とほすかたり	一冊	中井登菴著
非物篇	六冊	五井蘭洲著、竹山寫
非徵卷(一、二缺)	七冊	同
勢語通	四冊	蘭洲手稿
禮記集註(明板)	五冊	竹山首書
易斷	五冊	竹山手稿
左傳比事諦	三冊	同
近思錄	四冊	同首書
閑距餘筆	一冊	同手稿
詩經集傳(明板)	四冊	同首書

鷄肋篇疑文 一冊 同手稿

四書句辨 一冊 同

四書(明板) 四冊 同首書

三宅石菴懷德堂額字 一面

木司令 一面

蕉園題字並銘

逸史(成稿本) 十三冊 竹山手書

逸史獻上記錄 一冊 同

逸史進牋 一卷 同

逸史(初稿本) 十二冊 竹山手稿

中井竹山咏 一幅

福壽草詩 一幅

中井竹山錦袍詩 一幅

日本史抄書(零本) 一冊 竹山手抄

明史鈔(零本) 一冊 同

大日本史(第二、九、十缺)五十七冊

春樓、竹山、履軒、竹里等三十七人手寫

日本書紀(合本) 四冊 竹山首書

附 竹山手抄一冊

蒙養篇 二帖 同手書

登菴先生歌文卷 一卷

蕉園先生詩卷 二卷

蕉園先生文卷 一卷

五井蘭洲水艇水雲 雙幅

三宅春樓李白乘舟 雙幅

懷德堂考定中庸 一卷 三宅春樓手定

中庸錯簡說 一卷 竹山手記

懷德堂記 竹山撰並書

中井桐園歲旦詩幅

並河寒泉擬風一篇

墨菊 中井登菴贊、泉冶醉畫

並河寒泉出懷德堂歌

藪孤山詩幅

中井抑樓開方廣寺火偶作詩幅

學問所來歷 一卷 竹山手書

學問所建立記錄 一冊 同

學校公務記錄 二冊 同

學校公務書類 一卷 同

衛尹御入諸書

懷德堂壁書

安永七年六月

懷德堂外事記

學校再建文書

懷德堂壁書

懷德堂書院揭示

懷德堂定約附記

大阪學校書類

學校內事記

御同志中相談覺

三宅幸藏變宅に付御同志中懸合覺

萬延二年義金助成金簿

懷德堂義金簿

懷德堂助成金其他

中井竹山遺言狀

兄弟宛二通

印章

(竹山八十五、履軒五十二、蕉園十七、石窩

一面 竹山手書

一面 竹山手書

一冊 同

一卷 同

一面 同

竹山手書

一冊 三宅春樓手記

竹山手書

一冊 同手記

一冊 同手書

同

一冊

四通

四通

四通

御同志宛一通、淵藏、七郎

兄弟宛二通

印章

五十二、柚園十四、桐園三十三)

博山香爐 一個 履軒手製

菊刀子 一口 (山階宮晃親王所賜)

ナコト點笏 履軒細書

螺鈿韻匣 韻字同手書

螺鈿算盤 同所用

▲追記

來賓遺族聽講生等には記念品として石菴登菴兩先生墨迹の扇子壹對、懷德堂要覽一冊、登菴先生遺著堂友會印行の不問語一部に好學煎餅一罐を添て贈呈したり。

▲記念號を印刷するに臨みて

山本 槽 信

創學以來二百年の古き傳燈を誇る我が懷德堂が、文明開化の大正の大御代に若返つてこのかた十周年なるを記念する式典の記録を小沼量平君がまとめられたのを、後世までの語りぐさにも印刷してお願ちすることにした。二百年の間、贅六根性の陶冶

化と浪華文化の向上發展とに、絶えざる寄與をして来たことは、聊か誇つていゝと思ふ。このこと 天聽に達するだに有難きに、ことし六月九日 久遠宮同妃兩殿下駕をまげさせ給ひ、かざる光榮に感泣の外はない、優渥なる聖恩の萬一に報ひ、この光榮にそひ奉らねばならぬ。聽講生に好學の士多きも道理であつて、七名の聽講十年繼續者さへ數ふるにいたる聽講生はまた心の修養所としてこの堂を愛護するの精神に燃れてゐる。新奉祀諸先生の神位の揮毫を、堂に直接關係なき一書家に依頼さるゝやの噂を聞き傳へし聽講生は、日夜謝恩の眞心もて尊敬すべき神位であるから、松山先生に御揮毫願ひまつるこそ至當である。と歎願の結果、我々の希望は成功し一同大いに喜んだことである。ささいなことながらこの堂を愛護するのいかに深きかが知られる。新道消長願諸君と申されて黄泉に眠らせらるゝ西村先生の靈もさぞお喜び下さることゝ思ふ。狩野先生が聖諭廣訓の第十條、務本業以定民志を講義して、人として業務のないものはない。これを以て衣食しその業務によつてなんか社會のためにならんければならぬ。志

とは心のもどづくところで、それぞれ本分を守つて世の中のためになればいゝと思へばなんの争ひもない。わきみてうらやまずに一直線に進めといふのであります。そこまで氣をつけてゐますと仰せられたのは、業にいそしむかたはら學をたのしむ境遇にある私どもの心得體驗すべき言葉である。いまや重建十周年を迎へて、ぐんどのびあがらうとしてゐる我が若き懷徳堂の精神目的學業に諒解ある諸君が、廣くこれを利用して修養に資せられんことを望むは、ひとり諸君の人格の陶冶向上のみではない、まことに修身齊家治國平天下のことである。

昭和貳年貳月貳拾貳日印刷
昭和貳年貳月貳拾八日發行

(非賣品)

大阪市西區八幡屋町九七

編輯人 小 沼 量 平

大阪府豊能郡池田町本町

印刷所兼 代表者 原 田 長 治
太陽日報社

大阪市東區豊後町懷德堂內

發行所 懷 德 堂 友 會

電話三五五番